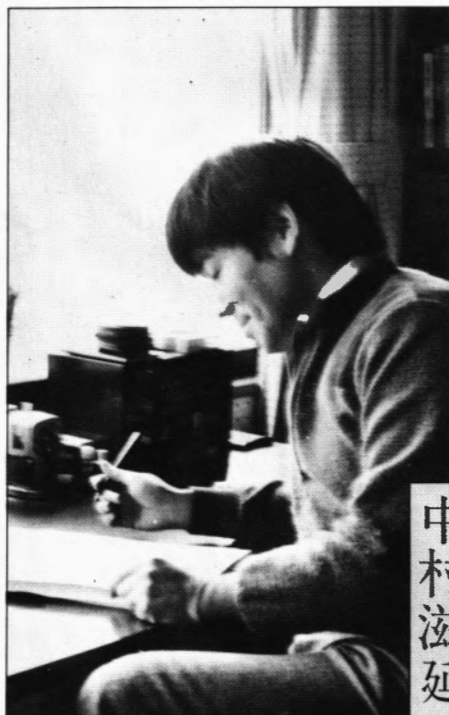


## 自分の視点で曲をかくと

## 現代音楽になる

なかむらしげのぶ  
中村滋延

「リコーダーはあくまで素朴な楽器、奏法の簡単な楽器であつてほしいと思う。多くの人が、リコーダーを音楽表現のための一番身近な素材であると認識するようになれば、今後ますますリコーダーは広く普及するであろう（アンケートより）。

中村さんは、大阪・高槻市の自宅で「N・ミュージック・スタジオ」を主宰しています。このスタジオでは、創造的音楽学習と題して、子ども達が音楽に興味を持ち、自由な音楽表現ができるようになるための環境づくりが行なわれています。そこでは、リコーダーも教材として使用されるとの事で、中村さんとのインタビューの中でしばし、リコーダーを活用しない手はない、音楽表現を豊かにできる楽器がリコーダーだといった発言が飛び出しました。

作品リストにダンスリー（ダンスリール・ルネサンス合奏団）の曲が載っていましたが、彼らの曲を手がけたきっかけは。

中村 僕がドイツから帰ってきて、大阪文化センターと一緒に演奏会の企画をしたんです。その演奏会のタイトルが「異質な世界の出会い」。要するに古い楽器で現代音楽をやってみたり、琵琶とギターを合奏してみたりする企画をたてていました。その時に、ダンスリーの存在を知りました。彼らの音楽をお聴きになっていかがでしたか。

中村 一番最初に、アラビアの音楽だと思ったんです。（笑）おおよそヨーロッパ的な感じしなくてね、逆にすごくそこに惹かれたんです。僕は音楽家ですけどクラシックの普通の音楽会にあまり行かない。ところがね、そうでない音楽会で民族音楽聴いたり、ダンスリーの曲聴いたりするとスーッとはいっていきけるんです。ダンスリーのために初めて曲を作った時は、西洋楽器でやっていたことをそのままダンスリーの楽器に移しかえたようなところがありました。その曲は曲なりに、すごくおもしろいと自負してゐるんですが、ダンスリーの持ち味を生かしたかというところとちょっと疑問なんです。今度は本当にグループの個性とかルネサンス期の音楽のための編成を考えた曲作りをしたいですね。それはたとえば、ヨーロッパの音楽史を通さないでルネサンスを直接見て、ダンスリーの場合だと中世の音楽として接していきたい。だから現代音楽風な音楽ではないと思うんですけどね。

——ダンスリーですと、エリック・サティの曲ですとか、坂本龍一さんの曲とかいろいろレパートリーがありますね。

中村 ええ、それはそれでおもしろいと思いますけど、僕は中世のにおいのする、僕の個性がでる曲をかきたいです。ちよつと前までは、いかにも現代風でございますよという曲をかいてたんですよ。二年位前からかな、そういう自分の姿勢に疑問感じてまして、つまり現代に僕が生きる視点でモノを見ていたら全て現代音楽になるんだと。それから平気でペンタトニックとか使うようになりました。今、すごくダンスリーの曲をかきたいと思つてゐるんです。

——アンケートで、リコーダーを身近な楽器だとお答えになっていましたがその理由は。

中村 たとえば、値段がすごく安いです。それから練習するのに少しも難しくなく、あんな持つてるやろ、持つておいてやみたいな感じてね、皆持つてるし。僕だって時々気が向いたら、わーっとデタラメにふいたりしてね。僕、今自宅で教室ひらいて子どもたちに教えてゐるんですけど、音の表現手段としてお琴とかギター、バイオリンやマリンバなんか使ってます。その中でもリコーダーはよく使います。

——教室でのリコーダーの使い方は？

中村 まず一つはね、身近な楽器ってかきましたけど、リコーダーは身近すぎるんです。学校でいつも自分が持つてるもんだから、目の前に打楽器

プロフィール

昭和25年大阪生まれ。

昭和52年愛知県立芸術大学大学院修了。

在学中は石井欽氏に師事。現在、同志社女子大学講師。

昭和47、49年NHK毎日音楽コンクール、

昭和51、52年国際ガウデアムス作曲コンクール等に入選。

作品に「ルネサンス楽器のためのソネット」他がある。

効果的な使い方ということでしょうか。  
中村 リコーダーのレパートリーを認識できるような音楽活動が活発になるといいと思います。僕らが子供の頃スペリオ・パイプと言った時分に比べて、今のリコーダーは一人前の楽器なんだっていう認識はすごくありますから。ただね、これからの事となると、どうなのかな。たとえば小学生的の頃からリコーダーには木製のものもあるし、本当にいい楽器もあるんだとわかってればね、取り組み方が違ってくるでしょうね。学校まわりの

なんかと一緒に並べると珍しい楽器の方にさーっ  
と行くわけなんです。僕ね、今度リコーダー  
だけを使って音づくりをやってみようと思ってる  
んです。リコーダー以外のものを触らせなくてね、  
バスとかいろいろ大きなサイズのリコーダーを揃えて  
やってみたいんです。あと、リコーダーをやりま  
すとね、ピッチ合せて時間を食うんです。子ども  
が笛を持ってきてピアノをたたいてピッチを合わ  
せるんですけどね。  
——小学校三年生位から、リコーダーが教材楽器  
として使われていますが、それについて何か感じ  
てらっしゃることは。

中村 僕はね、リコーダーを子どもに持たせるこ  
とはちっとも悪いことだと思いません。非常に身  
近だし、古典の音楽に結構リコーダーを主体とし  
た音楽が多いわけでしょう。そういった意味で西  
洋音楽への導入でもあるわけだし、指使いがやさ  
しくて気軽に演奏できる。それに音色も暖くて優  
しくていいですよ。問題は使い方なんじゃないで  
しょうか。

——話が変わりますが、ドイツの現代音楽の状況  
についてさかせて下さい。  
中村 僕がいた時からもう六年たってますから、  
変わってるかもしれないませんが、当時は活発に現代  
音楽に取り組んでましたね。日本では作曲家が個  
別にあちこちに点在してやっってる感じでしょう。  
ドイツの場合、少なくとも文化としてのはっきり  
したうねりがあったし、やっぱり取り組み方が違  
うと思いました。  
——具体的にどこが違うんでしょう。  
中村 たとえば、現代音楽が全然評価されなくな  
っても、これだと決めたらやり続ける人はたくさ

音楽会なんかで本当にリコーダーの名手が子ども  
達に曲を聴かせる、そうすると恐らく認識が変わ  
ると思います。それと、非常に音楽表現を豊かに  
する楽器なんだって、子ども達にわからせるよう  
な、そういう努力を指導者がしないとダメでしょ  
うね。  
——子どものためのリコーダー・アンサンブル曲  
集を企画中の事ですが。  
中村 僕がやっている子どものための音楽教育の  
一環です。きちんと五線譜にかいたものもあるし、  
言葉の指示だけで子どもが簡単に演奏できる曲も  
あるし、全音階的な曲が中心になると思います。  
リコーダーは決してフルートの前身ではないです  
から、他のオーケストラの楽器で代用できるよう  
な曲はかきたくないですよ。わかりやすい、親し  
みやすい曲集にしたいですね。

論理的に物事を考えるんです。いい作品は感覚的  
に素晴らしいものももちろんだけど、やっぱり論理的  
に説明できると思うんです。説明できるっていう  
とちよつと語弊があるけど、説明しようとする、  
解明しようとする人間の持つてる知的欲求ね、そ  
ういうのがやっぱりあると思うんです。決して感  
覚に流されないで、作品を分析する。ドイツの現  
代音楽の本なんかだと作品の分析例とかいっぱい  
出ている、いろいろな人が寄稿しています。日本  
ではあまりそのような傾向が見られないですね。  
——最後になりましたが、中村さんが今後の活動  
でめざすものは。  
中村 僕は演奏会をやる時いつも二通りのことを  
考えるんです。これは、来てくださるお客さんに  
サービスする演奏会にしよう、そうじゃなければ、  
何ていうか学会みたいな、一つの講習会みたいな  
演奏会にするかのどっちかにしよう。作品をか  
くことで自分の世界を必死に求めるんだし、演奏  
会はその外に主張するわけでしょう。やっぱ  
り何をいいたいのかはっきり出していきたい。そ  
れと、作品をいわゆるプロの人が聴いてなぜこう  
いう音楽現象が起きるのかー作品自体を論理的に  
考えるスペースがあつていいと思うんです。これ  
からはそんな演奏会を企画していきたいし、作曲  
活動のかたわらで、子どもたちの音に対する創造  
力を育てていきたいですね。  
——どうもありがとうございました。